

国際開発プランニングコンテスト2015

活動報告書



2015

はじめに

—代表挨拶

2000年から始まった「ミレニアム開発目標(以下MDGs)」。国際機関のみならず、国や企業、NGOといった様々な人や組織が世界規模で取り組んでいる点がこれまでの国際開発の取り組みと大きく異なっています。その達成状況を見てみると絶対貧困者数の半減やスラム居住者の生活改善など、達成された目標がある一方で、未達成の目標も少なくありません。また地域別で見るとその達成状況には大きな差があります。

そんな中、達成期限である2015年を迎えました。「MDGs」の課題について、すでに議論は進み、「持続可能な開発目標(以下SDGs)」と呼ばれる新たな15年目標も生まれようとしています。「MDGs」では焦点があてられなかった、防災や、障害者支援の他に、幸福度や満足度といった数字でははかれない開発目標を掲げていることが「SDGs」の特徴として挙げられます。「MDGs」から「SDGs」への移行は、すなわち国際開発が新たなステージへと向かっていことを意味していると言えるでしょう。

このような世界情勢を背景に、2008年にIDPCは発足しました。国際開発を志す若者に、国際開発分野に必要な能力や視座を学ぶ機会を提供すべく、国際開発プランニングコンテストを開催しています。前述したように今年には2015年という国際開発において節目の年です。このような国際開発の潮流の変化の狭間にいる今だからこそ、ただ国連を中心に決定された開発目標を素直に受け入れるのではなく、これからの15年において間違いなく中心を担うであろう私たち自身が、新たな開発課題が何であるのか捉え、見つめることが重要であると考えます。そこで第6回国際開発プランニングコンテストでは、参加者には「MDGs」後の開発課題を考え、それを解決するプロジェクトの立案を行って頂くべく、東京会場では「ポストMDGs」を、大阪会場では「SDGs」の主要トピックである「dignity」をテーマとしました。また持続可能性という側面を強調すべく、東京会場では社会起業家という立場を同時に設定しました。これらの背景から生まれた今年のケースは、自由度が高いものの、社会起業家という立場をこれまで意識した参加者が少なく、プランニングが大変難しいものとなりました。しかしながら、今回の国際開発プランニングコンテストを通じて経験した挫折や、得た学び・発見がこれからの国際開発の問題を新たな視点で見つめるきっかけとなることを願うと同時に将来共に働くパートナーがこのコンテストの中から見つかることを期待しています。

最後に第6回国際開発プランニングコンテストを開催するにあたり、多くのゲスト、協賛企業のみなさまにご協力頂きました、改めて感謝申し上げます。今後も国際開発をキーワードに、全国の学生、社会人、有識者をつなぐプラットフォームとなるべく、IDPCは活動してまいりますので、引き続きご協力よろしくお願い致します。

IDPC関東 代表
埼玉大学経済学部経営学科 4年
佐藤 大恭

IDPC関西 代表
京都大学法学部 4年
久保 裕美

Contents

04 開催概要

05 東京会場報告

参加者の傾向／全体スケジュール／最終発表・各チームの概要／プランニング／講演・講座／アンケート分析／その他のコンテンツ

21 大阪会場報告

企画の趣旨／参加者の傾向／全体スケジュール／プランニング／各チームプラン概要／講演・講座／その他のコンテンツ／アンケート分析

37 運営報告

組織概要／関東支部／関西支部／決算報告／協賛・協力会社

開催概要

国際開発プランニングコンテストは以下の要領で開催した。

－東京会場－

日時：2015年2月17日（火）～20日（金）

場所：国立オリンピック青少年記念センター

対象：将来国際開発に携わりたいと考えている全ての人

参加人数：53名（欠席者3名）

参加費：1万5000円

－大阪会場－

日時：2015年2月23日（月）～25日（水）

場所：大阪市立長居ユースホステル

対象：将来国際開発に携わりたいと考えている全ての人

参加人数：21名

参加費：1万3000円

主催：IDPC



東京会場報告

1.参加者の傾向

－参加者の専攻分野、学年、大学などの基本データに基づいたidpc2015の参加者の特徴や傾向の分析

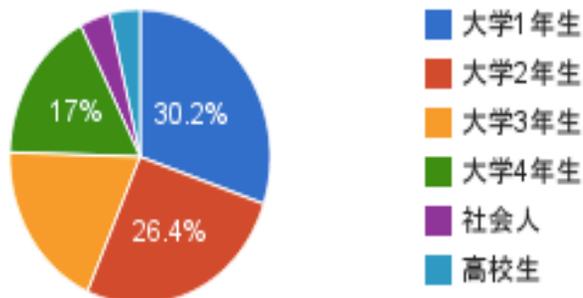
【専門】

全体的に教育、ジェンダー、インフラといった国際開発に不可欠な項目からガバナンスや防災、難民など複雑な諸原因に起因するものなど、多岐にわたる分野に興味、関心を持った参加者が集まった。

【学年】

参加者全体53名は大学生1年生が16名、2年生が14名、3年生が10名、4年生が9名、高校生が2名と社会人2名で構成された。全体的に幅広い年齢層の方が参加してくださり、プランニングの際にあらゆる観点から分析することができたといえるだろう。

2015年idpc参加者



【傾向】

関東会場での開催にもかかわらず、関東付近の大学だけではなく大阪や兵庫、名古屋、北海道など東京圏外の遠隔地から多くの学生が参加した。関西の学生参加者は大学や外部の国際開発を目的としたプログラムやスタディープログラムの経験者が多く、現状分析に加え、各個人の経験を踏まえたプランニングが実現されたといえる。

2.全体スケジュール

| | 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 | |
|-------|--------------------|------------------|-----------|--------------|---------|
| 8:00 | | 朝食 | 朝食 | 朝食 | |
| 8:30 | | プランニング | プランニング | プランニング | |
| 9:00 | | | | | |
| 9:30 | | | | | |
| 10:00 | | | | | |
| 10:30 | | | | | |
| 11:00 | | | | | |
| 11:30 | | 昼食 | 昼食 | 昼食 | |
| 12:00 | | プランニング | 進捗報告セッション | 中間発表 | プランニング |
| 12:30 | | | | | 最終発表 |
| 13:00 | | | | | |
| 13:30 | | | | | |
| 14:00 | | | | | |
| 14:30 | 受付 | | | | |
| 15:00 | 開会式 | | | | |
| 15:30 | 基調講演 | | プランニング | プランニング | 写真撮影・移動 |
| 16:00 | 休憩(～16:40) | | | | |
| 16:30 | アイスブレイク(～17:10) | | | | |
| 17:00 | IDPCピッチ(～17:45) | 結果発表・フィードバック・閉会式 | | | |
| 17:30 | 社会起業家セッション(～18:50) | | | | |
| 18:00 | 夕食(～18:50) | 夕食 | 移動 | | |
| 18:30 | 夕食(～19:40) | キャリアフォーラム | プランニング | ネットワーキングパーティ | |
| 19:00 | 国連開発セッション | | | | |
| 19:30 | | | | | |
| 20:00 | | プランニング説明(～21:45) | 宿泊 | 宿泊 | |
| 20:30 | | | | | |
| 21:00 | 宿泊 | | | | |
| 21:30 | | | | | |
| 22:00 | | | | | |
| 22:30 | | | | | |

3. ケース背景ならびに審査項目

ケース背景

2015年、あなたはフィリピンでとある事業を始めようとしている社会起業家です。フィリピンは国全体で経済成長を遂げている一方で、富裕層と貧困層の二極化による格差などの問題が生じており、国連の一大プロジェクトであるミレニアム開発目標(MDGs)では成し得なかった課題を解決する事業を試みます。あなたが起業するにあたり、資金調達として社会起業家を支援する財団に投資してもらうために、ミレニアム開発目標の現在までにおける成果、問題点、展望を踏まえたプロジェクトを立案してください。

審査基準

- ・イノベティブ性
プロジェクト内容の独創性
- ・妥当性
現場のニーズに合っているか
- ・実現可能性
プロジェクトが実現可能なものであるかどうか
- ・持続可能性
プロジェクト実施後も効果が期待できる
- ・インパクト
プロジェクト実施によって受益者へ与える生活向上の効果の規模
- ・プレゼン能力
心に響く、訴えかけるプレゼンテーションであったか。
図やグラフを用いて論理的かつ合理的に説明できているか。
言葉や動作が明瞭で分かりやすいか。

4.最終発表 各チームの概要

Aチーム

古谷涼 木村茉莉 秋葉光恵 児山一樹 川合里沙 長江隆

災害発生率の高いフィリピンでは、災害後の生活環境の悪化から貧困に陥る負の連鎖が存在する。弊社は、災害に対して脆弱性の高い人々が負の連鎖から抜け出し、安心して暮らせる社会の実現を目指す。そこで低所得者向け少額保険制度を導入する。低所得者の関心、フィリピンの災害・保険に対する価値観に寄り添い、商品に付随した保険の加入と災害時の補償を実施する。資金の循環のために中・高所得者向け商品販売を同時に実施する。さらに、既存防災管理システムを活用し社会起業家としての意義を高める。



Bチーム

星めぐみ 土居奈月 土屋智恵利 森君弘 窪健志 岩本知絵

フィリピン農村部の貧困に苦しむ農村女性にとっての気候に左右されない収入の確保、フィリピン女性のコミュニティの場の提供によって安定感の確保を目指す。解決策としてレイテ島のバナナの根の繊維を利用して育児手帳を作成し、日本で販売することで、雇用の創出と天候に左右されない収入源を作る。



Cチーム

角銅 健 我有才 怜 大津璃紗 樋口隆充 長澤薫 平野誠也 小川美紀

幼児用サンダル販売システムを考案します。収益の一部を、サンダル工房と妊産婦サポート施設を兼ね備えた4CHouseの運営に当てます。またFacebookを用いた広報活動を行うことで、顧客アピールをすると同時に現地の声を発信し社会にインパクトを与えます。これにより、MDGsにおいて達成度が低い予防可能な母子死亡率の改善が期待されます。



Dチーム

橋本悠 神本紗希 竹本舞 中尾優子 釜坂聖 下村直之

我が社は、乳幼児が満たすべき栄養素を補い、粉ミルクの代替品の役割を担うココナッツパウダーを、これまで存在しなかった新たなミルク「Gusto」として生産する。最貧困層の人々が高額である粉ミルクを購入できず、子どもたちが栄養失調になっていることにMDGsでは解決しえなかった社会問題を見出した。フィリピンの特産物の中で、近年話題のココナッツパウダーが、高栄養かつ安価、免疫力を高める効果をもつためである。



Eチーム

岩澤宏樹 嶋田真奈 日下部貴志 奥矢萌子 亀田陸生 山内ゆりか 盛田吉紀

「排せつ物堆肥化・有機肥料普及」プロジェクト
国内最大のトンドスラムに住む人々は、公衆トイレの不足・し尿の垂れ流しによる水質汚染等により、病気発生（ex.デング熱、肺炎）など不衛生被害が起きている。スラムの衛生環境改善を目的とした簡易トイレの普及により、排せつ物収集・堆肥化を行う。土地が疲弊した大規模農地に堆肥化された有機肥料を導入し、最初に無償提供する代わりに売上の一部を提供してもらうビジネスモデルである。



Fチーム

田口航大 岩田七海 田中淳平 中村麻梨奈 石川正詞 谷彩織 松浦航

「歯ミング」を提案する。貧困者が自己実現のチャンスを広げ、自立することを目標にする。課題は、貧困者の身の回りに自己実現を達成するチャンスがあるのにも関わらず、それに気付けないことと彼らの健康問題に着目する。解決策は、歯に良いココナッツ味グミを製造する中で、雇用を促進しつつその包装紙に生活上の知恵や情報を記載することで、貧困者の好奇心の向上による教育への意識改革の改善や歯周病による健康被害の改善に貢献するプロジェクトを提案する。



Gチーム

私本佳吾 朝岡結衣 宗野航来 早川彩紀 楠本悠太 甲斐史織 奥雄貴

私達はHIV感染率の増加を課題とし、ゴールを男女共にHIVの感染率低減に設定した。対象は一人で性的欲求を満たせない男性とした。解決策として、成人用玩具（男性の自慰行為に使用）の開発から流通まで担う会社を起業する。次に宣伝で需要拡大を図り、大量生産で低価格の商品を提供する。また多くの層で商品が流通し、不要な性行為が減少するほか、顧客がHIV問題を身近に感じ、自発的なHIV予防が促進、エイズ感染率の低減に貢献できる。



Hチーム

永尾まこ 酒井菜津子 河嶋可歩 岸本崇司 金丸博樹 出川優樹 野中美華

本チームはフィリピンで現地採取されたココナッツオイルを原料に、妊婦を生産者とした「良質安価」な石鹸の現地製造・現地販売事業である。顧客は既存の商品への物理的・金銭的アクセスが困難な低所得層の妊産婦及び幼い子をもつ母親とする。石鹸を使用しての手洗いを習慣化させることで衛生環境・衛生意識の向上に繋げ、上位目標である妊産婦死亡率・乳幼児死亡率の改善と共に心身の健康の増進を図る。



▼1日目 (2/17)

開会式／基調講演／アイスブレイク／IDPCピッチ／社会起業家セッション／国際開発セッション／プランニング説明

国際協力に関心を寄せる53名の参加者が集い、第5回国際開発プランニングコンテストが始まった。

社会起業家という立場のテーマを公開しMDGsに関連したプランを立案。

基調講演では国際開発について改めて考える時間となった。

初対面のチームメイト同士、アイスブレイクを通して打ち解けた。

その後講演で得たヒントを基に、フィリピンをテーマ国としたプランニングが始まった。



▼2日目 (2/18)

プランニング／キャリアフォーラム

明日の中間発表に向け、効果的でオリジナリティあふれるプランを練るため、各チーム熱心にプランニングに取り組んでいた。キャリアフォーラムでは近い距離感でゲストと話し、各々の夢や将来について現実的に考える機会となった。



▼3日目 (2/19)

プランニング／中間発表

中間発表では4名の審査員を前に、今までのプランニング成果を披露した。いただいたフィードバックを基に、最終発表に向けて改善点を考え直したり新しいアイデアを投入したりしていた。



▼4日目 (2/20)

プランニング／最終発表／結果発表／フィードバック／閉会式／懇親会

4日間の集大成として、5名の審査員および全参加者に対して各チームが作り上げたプランを発表した。上位3チームの結果発表では大いに盛り上がり、お互いの努力を称え合った。また審査員から直接フィードバックをいただき、各々のプランニング過程や発表内容を振り返る時間となった。

5. プランニング

idpcでは問題が存在する背景を設定し、それに対してプランニングを行う。今回の課題は「2015年、あなたはフィリピンでとある事業を始めようとしている社会起業家です。フィリピンは国全体で経済成長を遂げている一方で、富裕層と貧困層の二極化による格差などの問題が生じており、国連の一大プロジェクトであるミレニアム開発目標(MDGs)では成し得なかった課題を解決する事業を試みます。あなたが起業するにあたり、資金調達として社会起業家を支援する財団に投資してもらうために、ミレニアム開発目標の現在までにおける成果、問題点、展望を踏まえたプロジェクトを立案してください。」である。参加者は4日間、この課題に真摯に取り組むことになる。

プランニング：参加者はプランニングをするにあたり、PCM手法（Project Cycle Management）とDesign thinkingを組み合わせた方法を実践した。これにより、課題における中核の設定、計画立案、実施、評価といった一連のサイクルを構想し、それに対する独創性、実現可能性、持続可能性溢れたプランを提案しなければならない。限られた時間のなかで課題に向けてプランニングを行う。

中間発表：3日目に行った中間発表では1グループにつき16分(発表8分間、講評とフィードバック7分間、移動1分間)が与えられた。参加者はフィリピンの現状、問題を分析し、ビジネスをローンチすることで課題解決につながるプランについてグループごとにプレゼンテーションを行った。審査員の方々は各プランに対して国際開発の分野に限らずビジネス面やコスト面など幅広い観点より明敏なご意見をくださった。参加者は中間発表での反省点や改善点を踏まえ、最終発表に備える。

中間発表

【審査員】

| | |
|--------|-------------------------|
| 可部 州彦様 | 明治学院大学教養教育センター教員（社会起業家） |
| 武貞 稔彦様 | 法政大学人間環境学部教授 |
| 脇坂 知典様 | アイ・シー・ネット株式会社 |
| 筒井 哲郎様 | 一般社団法人シェア・ザ・プラネット代表理事 |

最終発表

【審査員】

| | |
|----------|-------------------------|
| 可部 州彦様 | 明治学院大学教養教育センター教員（社会起業家） |
| 武貞 稔彦様 | 法政大学人間環境学部教授 |
| 脇坂 知典様 | アイ・シー・ネット株式会社 |
| 筒井 哲郎様 | 一般社団法人シェア・ザ・プラネット代表理事 |
| 長谷川 まりこ様 | 認定NPO法人ラリグラス・ジャパン代表理事 |



6.IDPCピッチ

【概要】

「IDPCピッチ」とは、IDPCの参加者やスタッフが新メンバーの募集や他団体との協力の可能性を念頭に自らの活動を紹介する場である。↓

今回は、ソーシャル・ビジネスで楽天ショップオブザイヤー2014を受賞され現在大注目のボーダレス・ジャパン株式会社鈴木取締役副会長に出席頂き、ピッチに対するコメントを頂いた。

【発表者・内容】

1. 現状分析...今社会でどんな事が起こっているかを把握してもらう
2. 問題定義...聴衆に、自らの問題意識に共感してもらう
3. ソリューション...問題を解決するために何をしている/したいかを把握してもらう
4. ソリューションのアピール...ソリューションの意義・魅力を説明しソリューションに共感してもらう
5. チーム紹介...どんなチームでソリューションを実践しているかを把握してもらう
6. メッセージ...チームへの参加や協力を呼びかける



| 発表順 | 名前 | 団体/プロジェクト名 |
|-----|-------|---------------------------------------|
| 1 | 山内ゆりか | 国連フォーラムスタディ・プログラム |
| 2 | 木村茉莉 | NGO FEST |
| 3 | 金丸博樹 | アジア開発学生会議 |
| 4 | 早川彩紀 | Global Change Makers Program |
| 5 | 古谷涼 | Secondary Birth Competition |
| 6 | 橋本悠 | IDFC日本側実行委員会 |
| 7 | 太田優人 | International Development Youth Forum |

7.講演・講座

基調講演 ポストMDGsセッション

【概要】

MDGs達成のために最前線で活動されている近藤哲生駐日代表をお招きし、Analytical Judgement, Informed Decision, Good Planningという、実際に近藤様が赴任し活動に至るまでの流れをご自身のチャドでの経験を例にお話頂いた。MDGsの達成状況をみると、Goal.5 Improve Maternal Health が広範囲に渡り達成できていない。これに代表されるMDGs未達成課題を次の15年でどのように解決すべきか、ポストMDGsと期待されているSDGsと現在のMDGs比較で明確化した。特に、Goal.5 や女性問題、教育の解決に着眼しており、参加者のプランニングのヒントとなった。また一つの解決策として従来型のアプローチに新しいメディアテクノロジーを融合させた、様々なセクターによる連携を紹介頂いた。



近藤 哲生様

国連開発計画(UNDP)駐日代表

米国ジョーンズ国際大学(UNDP開発アカデミー)開発学修士号取得。1981年外務省入省。在フランス大使館、在ザイル大使館、日本政府国連代表部等を経て、2001年UNDPへ出向。2005年外務省を退職し、UNDP東ティモール人道支援調整・資金担当上級顧問、UNDPコソボ事務所常駐副代表、UNDPチャド事務所長等を歴任。2014年1月より現職。

社会起業家セッション

【概要】

「社会を変えたい」と本気で思い、行動してきた人たちが大学卒業後にごく普通の会社に入ってしまうことが社会にとって大損失であると警鐘を鳴らしつつ、ソーシャルビジネスとは何なのか、社会起業家とは何なのかについてご講演いただいた。ソーシャルビジネスは社会問題の解決を試みるころに出発点があり、持続可能なやり方という制限のもとおこない、ソーシャルインパクトをもって成功とする点で一般的なビジネスと異なる。また社会起業家とは、成長マーケットではない分野で持続可能なやり方という制限内で社会を変えるだけの事業規模に拡大していく職業である。ご講演の中にあつた、ステークホルダーをファミリーと捉え、「対等な立場で共に頑張る」というスタンスが印象的だつた。最後に、ソーシャルビジネスとはビジネスを通じて人間として当たり前のことを当たり前によりやることであると仰つていた。「社会を変える」という思いを持ち続け、キャリアとして生涯取り組んでいくことの意義を実感させられた講演だつた。



鈴木 雅剛様

株式会社ボーダレス・ジャパン 代表取締役副会長

2004年に株式会社ミスミに入社。配属2日目より新規事業開発を任せられ、2年半で売上高3億円超の黒字事業に成長させる。2007年にミスミ同期入社の田口(現：株式会社ボーダレス・ジャパン 代表取締役会長)と共に株式会社ボーダレス・ジャパンを起業。田口の「世界の貧困問題を解決する」という熱い志と、「世界で一番働きたい企業を創る」という自分の想いを、最速で成し遂げられると確信し、「一緒に会社をやるう」と誓い合う。起業してから8年を経た今、紆余曲折しながらも、理想の姿に近づきつつあると実感。株式会社ボーダレス・ジャパンが「社会起業家のプラットフォーム」として、社会を変える「本物のソーシャルビジネス」、「本物の社会起業家」とはどういうものなのか、を世の中に提示していく。

国連開発セッション

【概要】

人間の安全保障の定義を心の共創の観点から解釈し、物理的価値ではなく、心理的な価値を重んじ、生きがいを追求するものとした。また、プランニングのための重要な視点を交えつつ、持続可能な支援の在り方についてご講演頂いた。

プランニングのために問題分析をする際、問題の深層・根本原因にまで迫らない限り、抜本的な解決や持続可能な取り組みに繋がらない。そのためには、まず目の前の問題を解決する短期的な解決、次に問題の根絶を目指した中期・長期的な解決を組み合わせる必要がある。

プロジェクト期間終了または予算が尽きた瞬間に打ち切りになりがちな国規模の政策にソーシャルビジネスが公共政策を引き継ぐ形でビジネスを行うべきであるとした。公共政策と利益概念を組み合わせる必要があるということである。さもないと、持続可能性に欠けるプランとなりやすい。更に教育の重要さを説き、なにか計画を立て際に教育の要素を混ぜ込むと長期的プランになるとおっしゃっていた。

また、グローバル人材に必要な能力として、①創造力②コミュニケーション能力③思い切りと行動力があげられた。そのためには、成功体験を作ることが鍵となるとした。



田瀬 和夫様

国連フォーラム共同代表

デロイトトーマツコンサルティング執行役員兼世界戦略室ディレクター

日本経済と国際機関・国際社会の「共創」をテーマに、企業の世界進出を支援し、人権デュー・デリジェンスをはじめとするグローバル基準の標準化、企業のサステナビリティ強化支援を手がける。1992年外務省に入省し、国連政策・人権人道・アフリカ開発・国際機関拠出金・人間の安全保障などを担当したのち、2004年に国際連合人道問題調整部人間の安全保障ユニット課長。

2014年に国連を退職し、現在デロイトトーマツコンサルティング株式会社執行役員兼世界戦略室ディレクター。大阪大学招聘教授。

キャリアフォーラム

【概要】

様々な機関/組織にて国際開発の第一線で活躍されている8名の方をゲストに招致し、仕事内容やキャリアステップについてお話ししていただく。8名それぞれがブースに分かれ、参加者は関心のあるブースを自由に移動する。座談会中は、20分間のトークタイムを4ターム繰り返す。学生たちにとって、国際開発の第一線で活躍されている方々と直接話し出来ることは非常に貴重な機会であるため、ゲストのご経験を食い入るように聞き、取りこぼさないよう熱心にメモを取っていた。国際協力業界をより身近に感じ、各々が将来の進路を考えるためのヒントを得ることができた。キャリアフォーラム終了後もゲストのところへ個別で質問しに行く参加者も見受けられた。

砂田 薫様

一般社団法人 日本ギャップイヤー推進機構協会（JGAP）代表理事

現在お茶の水女子大学特任准教授（キャリア）を併任。早大招聘研究員（価値創造マネジメント研究所）、朝日新聞社社友。日本創生の東京21Cクラブ、社会起業支援のSVP東京に所属。

慶応義塾大学卒業。朝日新聞社入社後、アイルランド国立ダブリン大学マーケティング修士課程修了。東工大大学院博士後期課程イノベーション専攻単位取得満期退学。1995年に初代の朝日新聞社広告局シンガポール駐在として、事業所立ち上げ。デジタルメディア部長、メディア推進部長等を歴任。関連会社数社の非常勤取締役を併任。2013年10月より、文科省「学事暦の多様化とギャップタームに関する検討会議」委員。

招待論文「ギャップイヤー導入による国際競争力を持つ人材の育成」（日本学生支援機構、2012年3月「留学交流3月号」）「グローバル・リーダーを育成するために、なぜギャップイヤーが必要なのか～産官学民各セクター連携による人材育成」（英語教育協議会、2015年1月「英語展望」）他。



武貞 稔彦様

法政大学人間環境学部教授

1990年東京大学法学部卒業後、海外経済協力基金（OECF）（当時）に入社。開発と環境のバランスについて答えを見つけるため途上国向けODAの仕事に従事。国際協力銀行（JBIC）への組織改編、インド駐在などを経て、2004年退職。同年より大学院に進学。2009年東京大学大学院新領域創成科学研究科にて博士号（国際協力学）取得。2009年明海大学経済学部、2010年より法政大学人間環境学部勤務。問題関心は「「持続可能な社会」とはどんな社会か」ということ。主な研究テーマは「開発事業に伴う立ち退きと生活再建」。



鶴木 由美子様

認定NPO法人難民支援協会 定住支援部コーディネーター

慶應義塾大学教育学専攻、カリフォルニア州立大学大学院ノースリッジ校にて異文化コミュニケーション学修士課程修了。移民の子どもたちの教育的・経済的支援をする団体でのインターンなども経験。児童福祉業界の人材支援・経営支援を行うソーシャルベンチャーでの勤務を経て、現職。



行方 一正様

株式会社エイチ・アイ・エス 取締役相談役

1978年10ヶ月ほど陸路で世界一周。

1985年株式会社エイチ・アイ・エスに入社

2004年代表取締役常務取締役

人事・経理・関係会社・総務担当

2005年代表取締役専務取締役

2008年取締役相談役

2011年取締役相談役CSR担当（現職）



真鍋 卓也様

国際協力機構（JICA） 総合調整課

2009年 横浜国立大学教育人間科学部マルチメディア文化課程卒業

2010年 英国サセックス大学 環境開発政策課程 修了

2011年 独立行政法人国際協力機構：バングラデシュ事務所（OJT）→地球環境部環境管理第二課（主にアフリカの廃棄物管理に係るプロジェクト監理を担当）→総務部総合調整課（主に国会対応関連業務を担当）



武藤 正樹様

アイ・シー・ネット株式会社 経営管理部 人事・総務グループ

2007年3月に大学卒業後、精密機器メーカーで新卒採用・総務を担当した後、2011年10月にアイ・シー・ネット株式会社へ入社。人事採用・総務・広報業務等に従事している。



脇坂 知典様

アイ・シー・ネット株式会社 ビジネス・インキュベーション・グループ

2002年に公認会計士試験に合格し、監査法人トーマツで約6年間、外資系金融機関による投資スキームの会計監査に携わる。英国の大学院で紛争解決学修士を取得し、国際NGOに参加。紛争後の地域で、住民の和解促進を支援した。アイ・シー・ネット入社後は、ナイジェリアで農産物の加工業者が金融機関の融資を受けるための調査や、アフリカ地域への日本企業の進出支援の調査に従事し、現在は、途上国でのビジネスの立ち上げ支援を担当。「40億人のためのビジネスアイデアコンテスト」（最終審査会：東京六本木で3月7日に開催）の企画・運営も行う。



渡辺 周様

日本電気株式会社 CSR・社会貢献室主任

NPO法人GRA理事・海外事業統括

光学メーカーにて開発・設計、海外技術営業に従事した後、コンサルタントを経て、現職に至る。社会課題を起点とするビジネス創造をミッションとし、企業内起業家（ソーシャルイントラプレナー）として、インドや日本で農業を軸とした新規事業の立ち上げやプロジェクトマネジメントを行っている。グロービス経営大学院卒（MBA）。



8.アンケート分析

参加者53名にコンテストに関するアンケートを実施した。以下にその結果からの考察をまとめる。

◆サブコンテンツ

「基調講演」や「キャリアフォーラム」といった各分野で活動される方のお話を聞く機会の評価が高かった。講演していただくゲストの方もプランニングコンテストという趣旨に合わせた講演をしていただいたので、参加者も自分たちのプランニングに反映しやすかったのではないかと考える。

◆プランニング

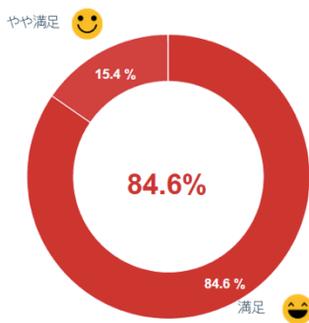
プランニングに関する満足度は概ね高く、今回のケース設定に関しても特に問題なく、意欲的に取り組んで頂けたようだ。

◆全体の評価点

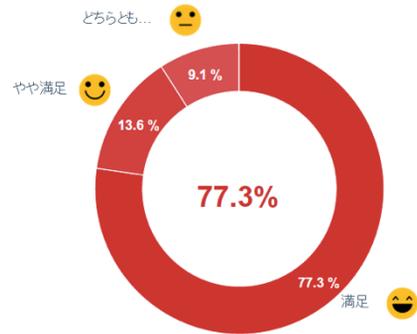
各コンテンツにおいて満足度を調査したが、参加者の約90%以上が「満足」「やや満足」と回答している。全体を通して今回のコンテストが参加者の期待に沿うものであったようだ。

◆全体の反省点

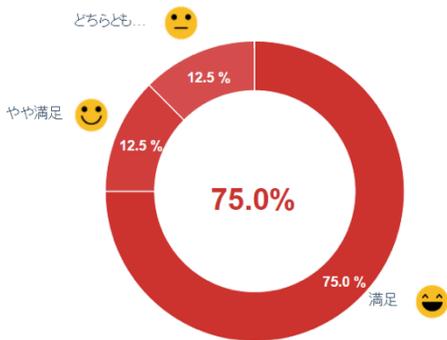
コンテスト全体の反省点としては、「機材の不具合」「タイムマネジメントの不足」などが参加者から挙げられた。どの指摘についても、スタッフ側のリハーサル不足に主な原因があると考えられるため、来年度以降さらに質の高いコンテストを開催するためにも改善していく必要がある。



【基調講演に対する満足度↑】



【キャリアフォーラムに対する満足度↑】



【最終日のプランニングに対する満足度↑】

9.その他のコンテンツ

【開会式】

あいにくの雨の中、北海道から九州に至るまで全国各地から過去最多の53名の参加者が集まった。近藤駐日代表に開会の言葉を務めて頂いた後、代表挨拶、スタッフ紹介、ケース背景の発表を行った。

【アイスブレイク】

プランニングにおいて、ひとつの解決手段にフォーカスするのではなく、あらゆる角度・方法から解決策を探るため、アイスブレイクではマシュマロチャレンジを行った。当初予定していた時間とは異なり、1日目の21時からの開始となったが、参加者は予想外の難しさに苦戦しつつも、マシュマロチャレンジを楽しんでいた。

【フィードバック】

審査員の方に、それぞれのグループごと個別にフィードバックを頂いた。参加者から審査員の方々に質問できる貴重な機会であったため、参加者は疲れも見せず多くの質問をぶつけていた。

【閉会式】

審査員の方々に総評を頂いた後、表彰式、参加賞の授与式をおこなった。クロージングムービーで今回のコンテストを振り返り、本コンテストは閉幕した。

【ネットワーキングパーティ】

今年度は50名を越える参加者・ゲスト・スタッフが集まり、コンテストの振り返りや意見交換を行った。2時間という限られた時間であったが、これまで交流の少なかった他のグループ、さらには審査員の方々と話を交わす貴重な時間となった。



大阪会場報告

1.企画の趣旨

大阪では3回目となる国際開発プランニングコンテスト。関西にしながらその道のプロフェッショナルと出会い、プランニングのプロセスを疑似体験し、同志と考えをぶつけ合う場を提供してきた。さらに本年度は、「Dignity：尊厳」という、開発ひいては生きていくうえで根本的と思われる事柄をテーマに掲げ、参加者それぞれに開発と尊厳、自分と相手の尊厳とは何かを考えてもらった。

・ケースの意図

今回参加者に与えた課題は、「2015年、あなたはチームのメンバーと団体を立ち上げることになりました。」問題分析やプロジェクトの妥当性には従来通り重点は置くものの、その前提として団体のビジョンやミッションを、テーマである尊厳とは何かを踏まえて明確にしてもらうことを狙いとした。現場でも、現地・支援者の理解を得るには、団体自身のビジョンやミッションが明確で心に訴えるものでなければならぬと考えた。



・ 審査基準

プロジェクトの審査にあたっては、優先項目と考慮項目の二つを設けた。前者には、妥当性・イノベティブ性・プレゼンテーション力をいれた。後者には、持続可能性・受益効果をいれた。

▶ 優先項目

- ・ 妥当性
プロジェクトの目的に対して妥当な内容であるか。目的から事業内容に至るまでの論理が成立しているか。問題分析から目的・目標設定、事業内容の策定に至るまでの論理が成立しているか。
- ・ イノベティブ性
プロジェクト内容の創造性。目的を達するための切り口が優れているか。
- ・ プレゼンテーション力
心に響く分かりやすいプレゼンテーションであったか。図やグラフが効果的に示されているか。審査員からの質疑応答に的確にこたえられているか。

▶ 考慮項目

- ・ 受益効果
プロジェクト実施による、受益者に与える生活向上への効果の規模
- ・ 持続可能性
プロジェクト実施後も効果の継続が期待できるか。



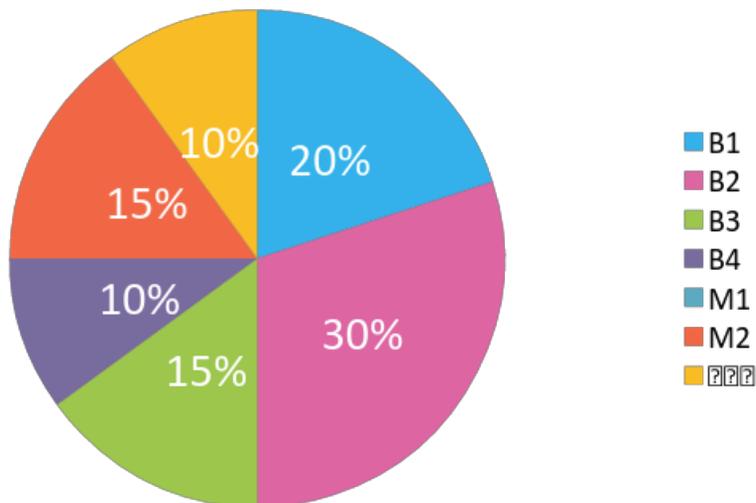
2.参加者の傾向

専門

法学、経済学、外国語、国際関係、国際ビジネス専攻が多かった。地域政治、平和構築、環境、会計を学ぶ参加者もいた。

学年

学部1年から4年まで幅広い参加があった。また社会人2名の参加もあり、実際の経験を踏まえたプロジェクト立案、ディスカッションができたといえる。



傾向

全体的に途上国でのボランティア、インターンシップ、学生団体等での活動、学術調査といった経験の豊富な参加者が多かった。特定の地域（中東地域や東南アジア地域など）に深く関心を寄せる参加者も少なくなく、明確な問題意識のもと、プランニングを行っていた。

3.全体スケジュール

| | 2/23 Mon | 2/24 Tue | 2/25 Wed |
|-------|--------------------------|-----------------------------|--------------|
| 8:00 | | 朝食 | 朝食 |
| | | プランニング | プランニング |
| 9:00 | | 「NPO/CSR/ソーシャルビジネスの違い」レクチャー | |
| 10:00 | | メンタータイム | |
| 11:00 | | | |
| 12:00 | | 昼食 | 昼食 |
| 13:00 | 開会式 アイスブレイク | プランニング | 採取発表 |
| 14:00 | レクチャー&ディスカッション プランニング | | |
| 15:00 | | | 結果発表 フィードバック |
| 16:00 | 基調講演 | 中間発表 | キャリアフォーラム |
| 17:00 | パネルディスカッション | | |
| 18:00 | | 夕食 | 閉会式 |
| 19:00 | 夕食 | | 移動 |
| 20:00 | プランニング | | 懇親会 |

4.プランニング

参加者を4,5人のグループに分け、2泊3日でプロジェクト立案を行ってもらった。

課題文

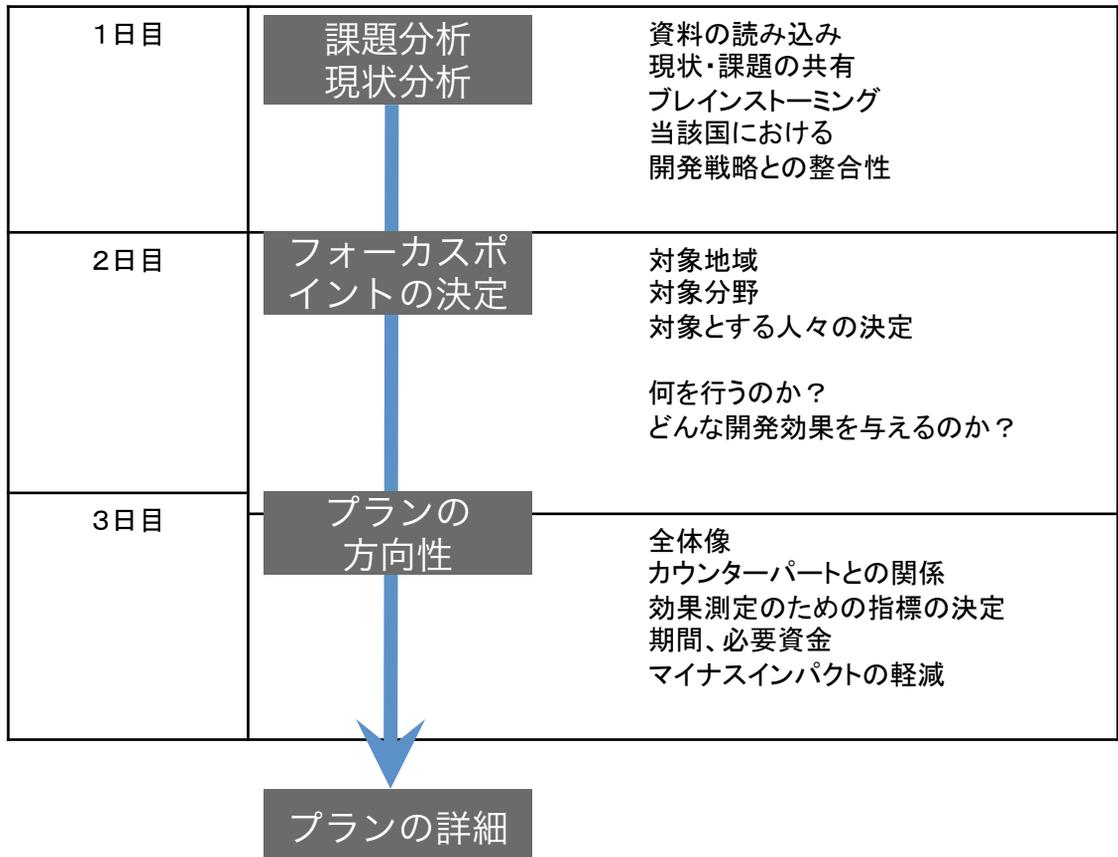
2015年、あなたは班のメンバーと団体を立ち上げ、フィリピンでプロジェクトを行うことになりました。あなたはポストMDGs議論のなかの「Dignity」に注目しており、フィリピンの人々の「Dignity」に関心があります。みなさん自身で「Dignity」とは何かを考え、日本人として、フィリピン人の「Dignity」にどう関わるかを考慮し、「Dignity」にまつわるプロジェクトを考えてください。

※NPOの手法とビジネスの手法のどちらを使っても良い。

発表の際には、以下の項目を含めること。

- ・ 立ち上げる団体のMissionとVision
- ・ 「尊厳」への考え方
- ・ プロジェクト概要
- ・ 事業の対象
- ・ 扱う問題とその理由
- ・ 目的
- ・ 手段
- ・ 予算

▶プロジェクト立案の流れ



Mission • Vision

自ら団体を立ち上げ活動をする際に最も重要とされるのがMission・Visionである。団体のMission・Visionは、団体の軸であり、看板となるものである。自らの理念（Mission）、そして描きたい未来（Vision）を明確化することは、他の人を巻き込み、外部から賛同を得る際にも大きな影響を与える。その為、今回のコンテストでは、各チームにまず団体のMission・Visionの明確化を図ってもらい、それを軸に活動や目標の設定などのプランニングを行ってもらった。

プランニングの第一歩

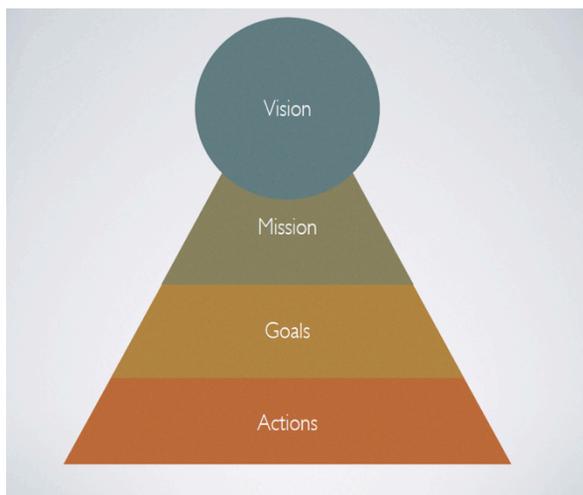
MISSION AND VISION

MISSION

• A one-sentence statement describing the reason an organization or program exists and used to help guide decisions about priorities, actions, and responsibilities.

VISION

- A future world that people would like to create
- Ultimate hope to accomplish as a result of effort of the organization



中間発表

コンテスト2日目午後、中間審査員をお呼びしての発表会を行い、フィードバックをいただいた。なお午前には、公益財団法人オイスカ 関西支部 事務局長の黒田吉則様にもお越し頂き、アドバイスをいただいた。

中間発表は各チームの最終的な評価には影響しないこととした。しかし、中間発表とフィードバックを経て、プロジェクト・発表の質が飛躍的に向上。大変意義あるものとなった。

審査員紹介

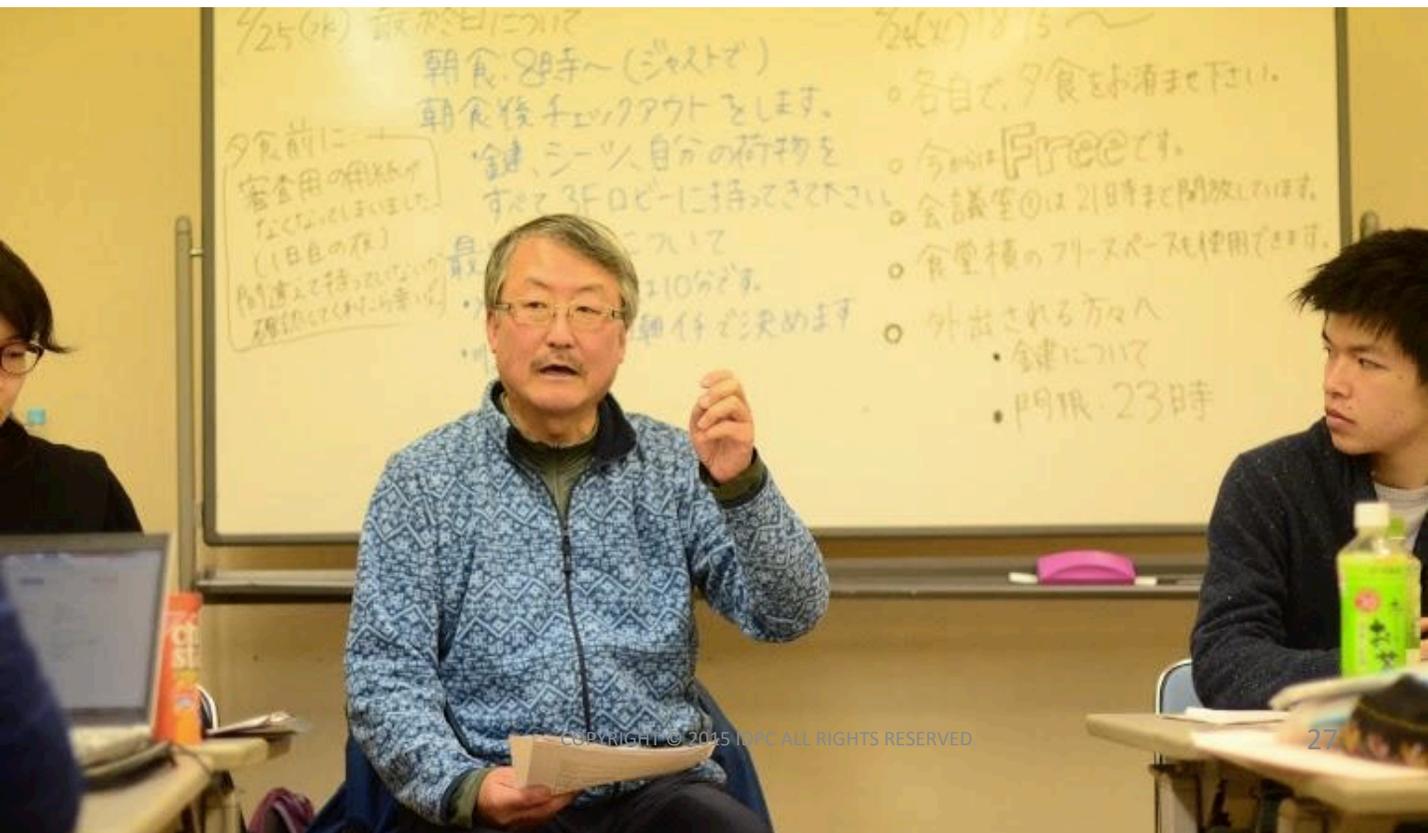
小吹 岳志様



フェアトレード・サマサマ
オイコクレジット・ジャパン事務局長
商社勤務のあと様々なボランティア活動、社会法人アジア協会アジア友の会（NGO）スタッフを経て、99年より現職。ベトナム・ビルマ・ネパール・バングラデシュなど、南・東南アジアの生産者団体、NGOとの取引を通じ、農村女性や難民、貧困層など社会的弱者の経済的自立支援に取り組む。2008年よりオランダの協同組合・オイコクレジットの協力団体、オイコクレジット・ジャパンの事務局長として、途上国のマイクロファイナンス機関への出資を呼びかけている。また、ワンワールド・フェスティバル副実行委員長として長年関西における国際交流・国際協力NGO/NPOの紹介。さらに日本フェアトレード・フォーラム（旧フェアトレードタウン・ジャパン）理事、帝塚山学院大学非常勤講師などを務める。

フィードバックの概要

まだ2日目ということもあり、小吹さまからは、全体として、具体性のなさ、論理の飛躍、規模が身の丈に合っていないなどの指摘をいただいた。また、事業の対象候補地の現状分析が足りていない、「その地域や受益者にニーズがあるか」「団体のVisionを実現するのに最適な場所か」を明示することが必要というご指摘も。事業のカウンターパートに民間企業を選んでいるチームには「事業に協力する企業のメリットは何か」明確にするようにとのアドバイスもいただいた。またNGOが実際に行っているプロジェクトを、途上国の現実をまじえてご紹介いただいた。



最終発表

最終日、6名の審査員および参加者を前に、各チーム8分間の発表をしてもらった。発表後は10分間審査員からの質問の時間を設けた。審査員には、審査基準シートを渡し、20分間の6名全員での審議の後、最優秀賞と優秀賞の2チームを選出・発表してもらった。最後に各チームへのフィードバックおよび全体総括をして頂いた。

審査員紹介

上田 和孝様



特定非営利活動法人SEEDS Asia (シーズアジア)
シニア・プログラム・マネージャー
社会貢献活動支援士。京都大学大学院地球環境学環境教育論分野東日本大震災研究グループメンバー。大学院修了後、シンクタンクの研究者として、まちづくり・防災に関する調査研究業務に従事。2007年7月より、NGOスタッフに転身。イランでのアフガニスタン難民支援、パレスチナ・ガザでの緊急支援、インドネシア・パダン沖地震の緊急支援の現地代表、本部での事業マネージャーを歴任した。東日本大震災発生直後より緊急支援活動に従事し、2011年4月～5月には現地で事業を指揮した。2011年7月よりSEEDS Asiaプログラム・マネージャーに就任、2012年7月より現職。ミャンマー、ベトナム、フィリピンなどの途上国での防災教育・コミュニティ防災事業や、東日本大震災で被災した気仙沼市での防災教育・コミュニティ復興に取り組んでいる。

海谷 奈々子様



ロート製薬株式会社 人事総務部 人事2グループ
2011年4月 ロート製薬入社。マーケティング本部、商品企画部にて医薬品、医薬部外品の商品企画に関わる(ハンドクリーム、水虫薬、乾燥性皮膚薬など)。2012年6月より、ロート製薬バン格拉デシュ社出向(Rohto Mentholatum Bangladesh)。マーケティング業務を中心に、立ち上げ業務に関わる。2014年5月 人事部総務部。現在は、①海外出向者の労務、研修等②新卒採用を担当。



喜多 昭治様



三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 政策研究事業本部 研究開発 第2部 地域・環境戦略グループ 副主任研究員

大学院で開発経済学、MBA、環境学を履修後、2006年に三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)に入社。国内自治体の行政経営改善や各種環境施策推進支援の業務に従事する一方、地域間国際協力の枠組み構築や現地政府機関等との連携の下、途上国に本邦民間企業等の持つ技術やサービスを移転するプロジェクト組成・展開支援業務にも従事。

島田 具子様



独立行政法人国際協力機構（JICA） 東南アジア・大洋州部東南アジア第五課

京都大学総合人間学部卒。イギリス・ヨーク大学戦後復興学コース修士課程修了。京大在学中、一年休学してNPO「JEN」のインターンとして旧ユーゴスラビア難民支援事業に関わる。2002年、独立行政法人国際協力機構（JICA）に入職。2006年からJICALワング事務所企画調査員として、平和構築や教育分野事業を担当。2011年からJICAの平和構築方針や支援戦略を担当するとともに、ウガンダ、ミャンマー、コートジボワール等の平和構築事業に従事。2013年10月にフィリピンを担当する東南アジア・大洋州部へ異動し、ミンダナオ平和構築事業を中心に担当している。

代島 裕世様



サラヤ株式会社 コミュニケーション本部 本部長

早稲田大学第一文学部卒業。進学塾講師、雑誌編集、ドキュメンタリー映画制作、タクシー運転手などを経験した後、1995年同社入社。商品企画、広告宣伝、広報PRを担当。特にCSR活動として2004年から「ヤシノミ洗剤」の持続可能な原料調達の見地に立ったボルネオ環境保全活動を展開。2010年にはアフリカ・ウガンダでユニセフを支援する「SARAYA100万人の手洗いプロジェクト」を立ち上げ、2011年にはBOPビジネスの試みとして現地法人SARAYA East Africaを設立、2014年3月にはアルコール手指消毒剤のウガンダ現地生産を開始。NPO法人ボルネオ保全トラストジャパン理事。

田瀬 和夫様



国連フォーラム共同代表 デロイトトーマツコンサルティング株式会社 執行役員兼世界戦略室ディレクター

日本経済と国際機関・国際社会の「共創」をテーマに、企業の世界進出を支援し、人権チュー・デリジェンスをはじめとするグローバル基準の標準化、企業のサステナビリティ強化支援を手がける。1992年外務省に入省し、国連政策・人権人道・アフリカ開発・国際機関拠出金・人間の安全保障等を担当したのち、2004年に国際連合人道問題調整部人間の安全保障ユニット課長。2014年に国連を退職し、現在デロイトトーマツコンサルティング株式会社執行役員兼世界戦略室ディレクター。大阪大学招聘教授。

5.各チームプラン概要

最優秀賞

グループD：NPO法人カラングラン

藤田恵奈 安藤真子 前田千明 内藤千賀

「トンド地区の女性のエンパワーメント」をビジョンとして掲げ、教育と女性という2つの側面からDignityにアプローチをした。TESDAを参考にし、新たな研修機会を設けることで知識・技術不足を解消させる。またDignityとは「自己表現」とし、使い古した化粧品を用いて女性を外見から変革させることで尊厳を高めるといった提案が審査員の心を掴み、以上のような結果へと至った。実際にもCoffret Projectというナチュラル化粧品の販売で得た資金で途上国を支援するといった活動もある。



優秀賞

グループA：Dream Picker

海沼修平 小坂橋留美 山中潤 古村和佳子

「スラムのゴミ山に暮らす人々の尊厳を取り戻す」ことをミッションとし、廃棄物に焦点を当てる。Dignityの定義を「自分に誇りをもつこと」とし、農村が貧困状態と言われるスラムにおいて、ゴミをリサイクル、サプリメント化するという有効活用することで、仕事としてのプライドや労働環境、所得向上そして栄養改善を試みる。審査員の方々からは具体性があり、負のものとしてとられがちなゴミを夢という正の感情へと変えていこうとした点に評価をされた。



グループB：特定非営利活動法人

EAT

大古田賢哉 今井友香 山田祐理子 吉川雄介

MICHELINと提携し、農村部から採った作物から最高級の料理を提供することで「明日を楽しみに生きられること」を定義とした尊厳へとアプローチする。出生に関係なく全ての人が希望とやりがいを持ち、可能性の広がる雇用を創出するというミッションを掲げ、小作農家の収入の向上から子どもが学校へ行けるようにするといった効果を挙げた。



グループC：Dairy to Daily

杉野聖 植田陽香 金澤拓磨 大野美帆

グループCでは、酪農を通して尊厳の実現を図った。酪農には、人口40%が従事する農業であることや、健康支援、そして政府間での取り組みが行われているといった側面がありセレクトをした。カガヤンバレー地域での新規雇用創出を事業対象とした。パートナー企業分析など他のグループと比べコンサルティング要素の強い印象を審査員に与えた。



グループE：極KOME

岡崎安由美 垣塚太志 風祭沙綺 野正理恵

ビジョンを「子どもを笑顔にできる社会の実現」尊厳を「ひとりの人間として最低限な文化的生活を営むことができる」とし、ムスリム・ミンダナオ自治区の経済水準の向上を目指した。資金調達といった短期から2000戸の経済状況回復といった長期にかけ解決目標を具体的に定め、最終的には貧困撲滅という大きな課題へとシフトしていった。



6. 講演・講座

基調講演・パネルディスカッション

異分野の専門家3名をゲストに迎え、基調講演会と「尊厳」をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

講演者と講演内容のご紹介



田瀬 和夫様

国連フォーラム共同代表
デロイトトーマツコンサルティング株式会社
執行役員兼世界戦略室ディレクター

日本経済と国際機関・国際社会の「共創」をテーマに、企業の世界進出を支援し、人権チュー・デリジェンスをはじめとするグローバル基準の標準化、企業のサステナビリティ強化支援を手がける。1992年外務省に入省し、国連政策・人権人道・アフリカ開発・国際機関拠出金・人間の安全保障等を担当したのち、2004年に国際連合人道問題調整部人間の安全保障ユニット課長。2014年に国連を退職し、現在デロイトトーマツコンサルティング株式会社執行役員兼世界戦略室ディレクター。大阪大学招聘教授。

「人間の安全保障」の観点から、「SDGs」とは何か、「尊厳」とは何か、を語っていただいた。愛や絆といった人間にとって最も大切な価値。人間の安全保障は、このような定量化出来ない「心理的な価値」「生きがい」に、真正面から向き合う開発アプローチだとおっしゃる。「心理的価値を重視した開発目標が必要だ」という国際的な認識が、ポストMDGsに「尊厳」という概念を持ち込む結果となったと教えてくださった。

野田 沙良様

NPO法人アクセス 事務局長

1980年生まれ。三重県出身。2003年、龍谷大学卒。高校時代にNGOや国際協力分野に関心を持ち、在学中からフィリピンの貧困問題に取り組むNPO法人アクセスでのボランティア活動に携わる。現在は理事、事務局長として事業計画の策定から広報・資金調達などの事務局業務全般をおこなう一方で、年2回はフィリピン現地を訪れている。

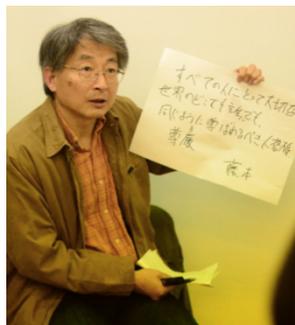


アクセスのインターン生としてフィリピンで二年間を過ごされた野田様。「現地の人を理解したい」という一心で、スモークマウンテンに暮らす女性や家族に寄り添われた思い出を語ってくだった。「日本人の勝手にやるならもう出て行け」と言われることもある...それでも、「よそ者」だけど、だからこそ価値を与えられることもある。そうおっしゃっていたのが、とても印象的だった。

藤本 伸樹 (ふじもとのぶき) 様

一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター (ヒューライツ大阪)
研究員

大学卒業後、民間企業勤務を経てフリーライターに。1988年～1994年、フィリピンに滞在。政府開発援助(ODA)と移住労働を中心に日比関係をめぐる課題に日比のNGOと協力して取り組む。1996～2001年、(社)部落解放・人権研究所にて国際担当。2001年4月から現職。2004年から近畿大学非常勤講師(人権科目担当)。慶応大学経済学部卒業、大阪市立大学大学想像都市研究科・博士課程単位取得退学。



フィリピン人女性の「人身売買」。女性の尊厳をふみにじる犯罪(強制労働や性搾取)が、日本に暮らす私たちのすぐ近くでおきていることを教えて下さった。フィリピンの総人口の10%が海外に暮らしており、その過半数が女性。家事労働や清掃、看護師などに携わる女性の多くが、暴力と搾取の被害にあっている現実。この「尊厳の侵害」をいかに防ぐか、について法的な側面からの示唆を頂いた。

パネルディスカッション

お三方の基調講演を経て、パネルディスカッションを開催した。ゲスト・参加者の距離が近い、気楽な「お茶会」をイメージしてのディスカッション。そんな雰囲気とは裏腹に、「尊厳死の是非」「普遍的な価値の有無」「外部者が価値をおしつけることの是非」...など、難解な議題について深く話し合ってた。最後には、「尊厳とは何か?」という問いにご自身なりの答えを出し、professional仕事の流儀のように、ボードに書いていただいた。

非常に面白く、知的好奇心と心をゆさぶる、有意義な時間となった。
お越し頂き、本当にありがとうございました。



キャリアフォーラム

最終日、幅広い分野からお越しいただいたゲストに、「直接」、キャリアについての疑問や質問をぶつけ、アドバイスを頂く時間を設けた。参加者には6名すべてのお話を聞いてもらった。自身のキャリアに対して新しい発見や決意が生まれたのではないだろうか。ゲストの方々から「今はどんな活動をしているの?」「こんなことをしている人もいるよ。連絡をとってみたいらどうかな?」などのアドバイス・質問をもらった参加者たちは、かなり刺激を受けたようだった。

ゲスト紹介（詳しいご経歴は27, 28頁を参照ください。）

上田 和孝様
海谷 奈々子様
喜多 昭治様
島田 具子様
代島 裕世様
田瀬 和夫様



7.その他のコンテンツ

開会式・アイスブレイク

開会式では、本コンテストのテーマ発表および説明を行った。これから始まる2泊3日のコンテストに、「Dignity」という大きなテーマが加わり、会場は一瞬戸惑ったようにも見えた。その後のアイスブレイクタイムでは、一人一人が自己紹介を兼ねて、自分の「ビジョン」「ミッション」を発表した。今回のプロジェクト立案で大事にして欲しい事柄を、まずは体感してもらいました。最後はマシュマロチャレンジを行い、チームでの結束力を高めてもらった。

メンタータイム

2日目の午前中に、公益財団法人オイスカ 関西支部 事務局長 黒田吉則様にお越しいただき、チームの進捗報告を聞いていただいたうえで、アドバイスを頂いた。各チームをじっくり回っていただき、参加者の質問にも具体的に答えて頂いた。午後からの中間発表に向け、自分たちの方向性について整理をする時間となった。



8.アンケート分析

参加者の満足度

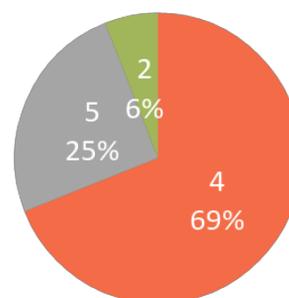
各コンテンツについて、満足度を0～5の6段階で評価してもらった。

| | |
|-------------|---------------------------|
| 基調講演 | 4(やや満足):41.2%、5(満足):58.8% |
| パネルディスカッション | 4:47.1%、5:41.2% |
| メンタータイム | 4:52.9%、5:23% |
| 中間発表 | 4:29.4%、5:41.2% |
| 最終発表 | 4:41.2%、5:58.8% |
| キャリアフォーラム | 4:11.8%、5:88.2% |

参加者がコンテストに求めてきたもの

プランニングする機会、国際協力の在り方、国際協力に携わる方との出会い、関西でのコネクションづくり、社会人に向けての知識 自分の力をどこまで生かせるかの挑戦、自分の思いと向き合うこと、思考する力 など

▶ 求めてきたものに対する満足度 (0～5)



コメント

- ・多くの方々の考えを共有できた。
- ・参加者の意識の高さによる刺激や、プロの方から沢山の話を伺えた。
- ・自分の迷いに一定の答えが出た。
- ・グループでのプランニングを通して、その難しさもやりがいも感られた。尊厳というテーマを深く考えたことはSDGsに移り変わるこの年にはちょうどよかったと思う。知識も深まったし、新しい夢も見つけられた。
- ・とても具体的な事例を考え、これまで持っていた知識やスキルを使えたから。また、足りない部分を把握できた。
- ・普段の生活では触れ合わない人々と出会い、普段の生活では考えないことを考えられました。

運営報告

1.組織概要

団体概要

正式名称：International Development for Progress and Change

創設：2008年4月28日

スタッフ数：12名

ホームページ：<http://idpc.weblike.jp/top/>

問い合わせ先：idpc.jp@gmail.com

Vision

「国際開発を志す若者の為のプラットフォームとなる」

国内には世界に視野を向けた若者がたくさんおり、その多くが「途上国のために役に立ちたい」と強く願っている。しかし、今の日本には彼らの芽をつんでしまうのに十分な理由が多く存在する。例えば、「国際開発の現場で必要とされる能力を身に着ける機会が少ない」ということであったり、「国際開発の分野での業務が現実的な将来の選択肢として捉えられにくい」といったことがあげられる。このような環境の中で、国際開発を志す若者たちを支援し彼らの可能性を広げるべく、IDPCは当初国際開発プランニングコンテスト実行委員会として2008年に東京でスタートした。IDPCは形を変えつつも初代の考え方を受け継ぎながら、国際開発プランニングコンテストやワークショップなど様々なイベントを通して、国際開発を志す若者や現職者たちが集まり、既存の問題が多く残る国際社会を変える力を得ることが出来るプラットフォームになることを目指している。

Mission

上記のVisionを実現すべく、以下の3つの場を提供することを目指す。

1. 国際開発に必要な能力を身につけられる『場』
2. 同じ熱い志を持った仲間と出会える『場』
3. 国際開発の第一線で活躍する現職者と交流できる『場』

2. 関東支部

スタッフ紹介

スタッフは少人数であるため、それぞれが他の局へも積極的にサポートを行っている。本年は学部1年から4年までだが、1年生が中心であり、例年に比べ若いメンバーが集まった。また専攻では法学部が多く、ほかに人間環境学部、経済学部となっている。

代表：佐藤大恭

総務：服部進太郎 藤原隆寛

渉外：加藤木文奈 衣川健人

研究：太田優人

広報：芝崎文子 中圓尾岳大

年間の活動

4.5月 前年度からの引き継ぎ並びに6thのメンバー集めを行った。本年は引き継ぎスタッフが1人からのスタートであったため、合同の新歓イベントに参加するなどしてIDPCの理念に共感スタッフをリクルートし、3名のスタッフで活動を再スタートした。

6月 藤村さまをお呼びし、PCM手法に関するワークショップを行う。小規模ではあったが、プランニングの基礎であるPCM手法を学ぶ貴重な機会となった。

7.8月 本年度の国際開発プランニングコンテストのテーマ、概要の決定を行う。今回は「ポストMDGs」をテーマに、また対象国をフィリピン、設定を社会企業家としたが、これらを決定するまでに何度も意見をぶつけた。

9月 各局の今後の動きの整理を行う。

10.11.12月 研究では対象国のデータの蒐集と並行してゲストへの依頼を行う。渉外では協賛金を集める為に、リストアップと連絡、実際にプレゼンテーションを行い、丙団体の魅力やコンテストの意義を訴えた。その結果5社から協賛を頂くことができた。

12月 総務を中心にコンテスト参加者の募集を開始する。本年度は応募者が定員を超えたため、募集の際記入して頂いた志望動機を参考に選好を行った。また広報ではFacebookやメーリングリストを中心に対外的な呼びかけをこの時期から特に集中して行った。

1月 コンテストの準備に向けていよいよ大詰めとなり、資料の完成や当日の動きの確認を行う。特に資料にはスタッフ間で実際にプランニングを行い、不足している資料を探し出しては埋める作業を繰り返した。

2月 コンテスト閉幕後は反省を共有し、報告書の作成にとりかかった。また来年度の運営にむけた引き継ぎを行った。

活動詳細

1. ミーティング

今年度はミーティングをオンライン中心に行った。そのためオフラインでのミーティングは月1回程度にとどまった。アジェンダとしては各局の進捗状況の共有や今後の役割分担の確認、またコンテストのテーマやコンテンツについて主に話し合いを行った。

2. ケースの作成

今年度はテーマを「ポストMDGs」とした。また参加者にはポストMDGsを、MDGsで達成できなかった課題に再度のぞむアプローチではなく、MDGsではフォーカスされなかった課題を洗い出し、それに対するプロジェクトを立案してほしいと考え、フィリピンを対象国とした。さらに社会課題に対して循環的な構造を考えてもらうべく社会企業家という立場を設定した。

3. 広報

IDPCのホームページやFacebookのほかに、スタッフの所属する団体やFacebookのグループページへの広報、さらにはメーリングリストや他団体への広報の協力を呼びかけた。

3.関西支部

スタッフ紹介

本年度は前年度スタッフ2人で始動した。コンテスト参加者および新規応募スタッフ2名が加わり、4名となった。7月から10月にかけて、既存スタッフの活動継続が困難となりスタッフ2名の入れ替え・代表交代を経て、11月に再スタートを切った。

代表 兼 総務：久保裕美
渉外：吉川智美 成子健児
広報：村上彩

年間の活動

5月 新しいスタッフ2名を迎えて、京都大学にて第1回IDPCサロンを開催。スタッフと参加者がフラットな形式で、あるトピックについて学ぶことを目的とした。第1回目のトピックは「開発におけるビジネスの在り方を考える」。

6月 スタッフ内で開発に関して学びたいこと、自分の思いをプレゼンテーションしあう「プレゼン大会」を開催。

7～10月 活動停止

11月 コンテスト開催決定およびスタッフの再編成を行う。

12月 関西独自の開催テーマについて議論。関東開催テーマ「ポストMDGs」をベースに、各自リサーチを行う。渉外活動開始。参加者募集開始。

1月 関東が作成した資料をベースに、関西テーマ「Dignity 尊厳」に沿った資料、コンテンツを準備する。

2月 コンテスト閉幕後は反省を共有し、報告書の作成にとりかかった。また来年度の運営にむけた引き継ぎを行った。

活動詳細

1.ミーティング

今年度は、昨年度と同様週に1回の頻度で、オフラインミーティングを行った。

2.ケースの作成

プランニングにおける自由度や、プロジェクトの持続性とその方法についてじっくり考えてもらいたいという思いから、参加者には、「NGOもしくはビジネスの手法で」プロジェクトを考えてもらった。また、従来はそれほど焦点をあててこなかった団体の「ビジョン・ミッション」をしっかりと考えるよう促した。

3.広報

IDPCのホームページやFacebookでの広報および、NGOのご協力のもと、インターン生への告知を行った。

4.決算報告

【関東】

| 収入 | | | |
|--------|-------|-----|--------|
| 収入元 | (円) | 数 | (円) |
| 前年度繰越金 | 0 | | 0 |
| 協賛金 | 70000 | | 70000 |
| 参加費 | 15000 | 53名 | 790000 |
| キャンセル料 | 7500 | 3名 | 22500 |
| 収入計 | | | 882500 |

| 支出 | | | |
|---------|---------|---------|--------|
| 用途 | 諸経費 (円) | 数 | 小計 (円) |
| 参加者食費 | 1940 | 62名×3日間 | 360840 |
| 施設使用量 | 369600 | | 369600 |
| WiFi接続費 | 24000 | | 24000 |
| 資料作成費 | 3420 | | 3420 |
| 当日備品 | 20000 | | 20000 |
| 次年度繰越金 | 104640 | | 104640 |
| 支出計 | | | 882500 |

【関西】

| 収入 | | | |
|---------|-------|----|--------|
| 収入元 | 円 | 個数 | 円 |
| 前年度繰越金 | | | 717 |
| 参加費 | 13000 | 21 | 273000 |
| キャンセル料 | | | 10400 |
| スタッフ活動費 | 5670 | 4 | 22680 |
| 収入計 | | | 306797 |

| 支出 | | | |
|-----------------|--------|---|--------|
| 用途 | 諸経費(円) | 数 | 小計(円) |
| 参加者食費・宿泊費・施設使用料 | | | 279925 |
| 資料作成費 | | | 2520 |
| 当日備品 | | | 3209 |
| ゲスト交通費 | | | 16560 |
| 支出計 | | | 302214 |

5.協賛・協力会社

Japan Brain Collaboration

株式会社 日商平野



Japan
Brain
Collaboration



 株式会社 日商平野

NISSHO HIRANO CO.,LTD.

一般財団法人生涯学習開発財団



生涯学習開発財団
Foundation of Global Life Learning Center

1983年設立(文部科学省所管)
理事長:松田妙子

一般社団法人 日本ギャップイヤー推進機構協会



ギャップイヤー ジャパン
GAP YEAR JAPAN

一般社団法人
日本ギャップイヤー推進機構協会 (JGAP)

英治出版

英治出版